

本館における「利用案内」の変遷

著者	高木 忠
雑誌名	東北大学附属図書館研究年報
号	26
ページ	132(1)-116(17)
発行年	1993-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133239

本館における「利用案内」の変遷

高 木 忠

はじめに

本稿は、本学の歴史の中で附属図書館本館（以下「本館」という。）が迎ってきた途を、本館利用の手引書として刊行されてきた「利用案内」に求めたものである。ここでは、「利用案内」を利用者用ガイドブックとして公的に刊行され今も保存されているものに限定した。そのため、補助的案内資料として担当掛が印刷配布したものや、本館に統合される以前の教養部分館が刊行した案内は除外した。

I. 創設から終戦まで（1907-1945）

明治 40 年、わが国三番目の帝国大学として設置された東北帝国大学は、札幌の農科大学（札幌農学校からの改組）と仙台に開設された理科大学（明治 44 年開講）との二つの分科大学で構成されていた。東北帝国大学図書館⁽¹⁾が設立されたのは明治 44 年であった。設立にあたり、初代総長沢柳政太郎（1865-1927）は、仙台に第二国立図書館を作り、東北帝国大学の図書館を一般市民にも公開して、地方文化の開発に貢献するという進歩的な計画をもっていたのではないかとされている⁽²⁾。

大正元年には、狩野文庫⁽³⁾が購入されている。和漢古典主体のこの文庫の購入は、文科系をも取り込んだ総合大学構想が沢柳総長の心に秘められていたからだともいわれている⁽⁴⁾。大正 4 年医科大学⁽⁵⁾が、大正 8 年には工学部が設置され、大正 11 年には法文学部が開設され、沢柳総長の構想はここに実現した。また、折からの世界大戦後の為替の有利さは、当時ヨーロッ

バ諸国で在外研究中の新任教官たちによる図書の買い付けに大きな影響を与えた⁽⁶⁾。そしてヴント文庫をはじめいくつかの文庫が購入され⁽⁷⁾、法文学部開設期には、すでにすぐれた蔵書構成を実現していた。

大正13年には書庫が、翌14年には図書館本屋が落成している。

昭和11年、本学創立25周年記念式典が挙行され、種々の催しが行われた。本館においてもこの年「和漢書別置本目録 未定稿」を刊行している。

1. 閲覧の栞 自昭和10年至昭和11年（写真1）

現在保存されている最も古い利用案内である。巻頭の「主旨」に「東北帝国大学附属図書館は、本館及び分館の二つに分れ、前者は……法文、理、工の三学部及び金属材料研究所に属する図書を、後者は、……（医）学部並に同附属病院の図書を取扱ふ。……本館で取扱ふ図書の中法文学部関係のものは本館の書庫に蔵め、他の大部分、夫々教室附設の図書室に配置する。……以下述べる処は、専ら本館に蔵められた図書に就ての利用案内で、本学々生一般の便宜に供する為である」とある文章から、その後長く踏襲され、本館の特色の一つともされている集中管理方式の端緒を垣間みることができる。

構成は、第一篇閲覧と第二篇蔵書とから成る。第一篇には、「閲覧券」「閲覧室」「帯出」「入庫検索」「制裁」の各章がある。ここでは、開館時間は、午前8時から午後9時までであること、日曜日は午後6時から9時までの開館であること、11月下旬から4月上旬まで暖房が入ること、2、3月の学年末には夜10時までの開館であることなどがわかる。館内規則の「脱帽し、和服には必ず袴着用のこと」や「入室のとき、昇降口にて備付の上草履に履替へ……」などには時代を彷彿とさせ、注意事項の「雑談、居眠りを禁じ……」には思わず苦笑させられる。

目録の検索では、請求記号符与のルールや目録カードの記述内容を詳し

く説明している。

入庫検索は、現在と同じく大学院生以上に制限していたが、入庫券の申請に、上半身名刺型写真の添付を求めるなど厳しい。

他帝国大学学生など一部に限定されてはいるが、すでに学外者の利用についての記事もみられる。

第二篇には、明治44年から昭和9年までの蔵書の推移を示した表がある。開講時の明治44年には、和漢書177冊、洋書200冊が本学の全蔵書であった。翌大正元年に狩野文庫が購入されたことで、その蔵書は飛躍的に増加した。昭和10年の全学の蔵書は、38万冊を数え、うち本館所蔵は和漢書16万冊余、洋書9万冊余に達した。この中にはヴント文庫をはじめ、シュタイン、ゼッケルなどの個人文庫も含まれている。ここではこれら文庫と西蔵大蔵経とについてその入手経緯についての説明が詳しい。

巻頭には、本館全景、閲覧室及びその略図の各写真⁽⁸⁾が、巻末には、附録として閲覧規程、閲覧細則、書庫内資料配置図がある。また、折り込みで和漢書古典・新書と洋書の分類表がある。

2. 閲覧の葉 自昭和12年至昭和13年

全体としての構成、内容は前年の版と同じである。この版には背文字(「閲覧の葉」)が入っている。

「はしがき」から電気通信研究所が設立されたこと、櫛田文庫⁽⁹⁾が新たに蔵書に加えられたことを知ることができる。

3. 東北帝国大学附属図書館閲覧案内 昭和17年

太平洋戦争勃発から4カ月後に刊行された案内である。戦争の影響で洋書の輸入が窮屈になり、出版用紙の割当制限で出版が困難になっていった時期の出版である⁽¹⁰⁾。そのため紙質も劣悪になり、大きさ、頁数ともに前

年版に比べて数段縮小されている。(巻末付表参照)

本館の沿革、蔵書の説明が前半の3頁に簡潔にまとめられ、主要部分を閲覧関係の記事が占めている。これまでの版に見られた目録カード見本がなくなるなど割愛された個所がある反面、逆に分類表に7頁、閲覧手続に4頁を割くなど、編集方針に変更が図られたことが窺える。

附録として、巻末に「辞典及び参考書類」のリストを11頁にわたり収載している。

狩野文庫本から「類聚國史卷第廿五」と「史記孝文本紀第十」とが国宝に指定されたのは昭和16年7月のことである⁽¹¹⁾。

昭和16年末現在での本学の蔵書は42万余冊(和漢書約22万冊、洋書20万冊余)となり、うち本館の所蔵は約32万冊を数えている。

4. 東北帝国大学附属図書館閲覧案内 昭和18年

紙質がさらに悪くなった。同じ頁数ながら、目次が削られ、本館平面図も縮小されるなど戦争の影響が紙面にも現れている。そんな中で、閲覧手続の最後に「希望図書ノ購入」が追加されたり、巻末附録の「辞典及び参考書類」のリストに年鑑と本館発行の蔵書目録類が追加されるなど、案内の改訂には依然意欲的であった。

戦局はいよいよ深刻の度を増し、学徒動員で閲覧室に空席が目立ち、応召で職員も戦地に駆り出されて行った。いろいろな面で沈滞していたこの時期に漱石文庫⁽¹²⁾が、戦火を避けるべく仙台に移されたことはひとつの明るい話題といえる。

II. 終戦から川内移転まで(1945-1972)

昭和24年の学制改革で、東北大学は、第二高等学校、仙台工業専門学校、宮城師範学校、宮城県女子専門学校を包摂して、それぞれ第一教養部、第

二教養部、第三教養部および教育教養部とし、事務組織内に図書掛をおいた。

また、法文学部が法学部、経済学部、文学部の三学部に分割され、教育学部も加わり文科系四学部となり、学生数も増加した。蔵書も年々増加し、書庫には収容力を超える図書が書架の増設で詰め込まれていった。

昭和 27 年頃には、これら蔵書を既存の書庫だけでは収容しきれず一部の部屋を代用書庫にしたり、閲覧室を仕切り仮書庫にするなど、増え続ける図書に数々の苦労を余儀なくされた。

昭和 30 年から 31 年にかけては、二つのコレクションが購入された。ひとつは和算書⁽¹³⁾であり、もうひとつは児島文庫⁽¹⁴⁾である。

昭和 40 年代に入ると、全学総合整備計画(昭和 36 年度スタート)が着々進み、本館も川内キャンパスに新築移転することが決まった。

昭和 47 年 4 月教養部分館を統合し、11 月新本館が開館した。

5. 東北大学図書館案内 昭和 30 年

学制改革後最初の利用案内である。

沿革、概況にはじまり、閲覧案内、分類表に至る構成はすでに戦前の版にみられたものと同様である。12 頁とこれまでにないコンパクトな案内で、図書の検索をはじめ、各項目の記事も要点のみにとどめるなど簡潔になった。概況の中で目につくのは狩野文庫をはじめとするいくつかの個人文庫の簡単な紹介記事である。

開館は、午前 8 時 30 分から午後 7 時までになり、日曜日、国民の祝日、年末年始の閉館が利用案内に明示されるようになった。

昭和 29 年 3 月時点での全学の蔵書は 86 万冊余を数え、うち本館の所蔵は約 45 万冊に達した。

6. 東北大学図書館案内 昭和31年

目次が表紙うらに印刷されたことを除けば前年版と大差はない。強いて違いをあげれば「館内規律」が再び掲げられている点であるが、さすがに戦前の「和服」や「袴の着用」といった文言は見られない。また、前の版にあった「教育課程文庫」⁽¹⁵⁾の説明も削除されている。

7. 図書館利用案内 1962 (写真2)

従来の縦書きが横書きに変わったこと、「である」調から「ですます」調に変わったこと、年号表記が元号から西暦に変わったことなどがこの版での大きな変更である。

構成も沿革や概要を省き、蔵書、目録カードの検索、借覧手続、文献複写など利用を中心としたものに変わった。これらが前年版と同じスペースに収載されていることから、説明は全体に簡潔をきわめている反面、分類表には四分の一の紙面を割いている。

内容では、分館に関する記事が削られ、代わって文献複写が登場したが、マイクロフィルムと印画紙焼付がその中心であった。目録カード見本を活版から写真版に代えたり、ラベル見本を再び登場させたり、いくつかの図や写真を用いたり、視覚に訴える編集方針に変わった。

表紙うらの利用が盛んになり目次や開館時間、休館日がここに移された。裏表紙には本学の襟章の図柄が示してある。

8. 図書館利用案内 1963

前年版とくらべ内容にはほとんど変更がない。奥付に表記されている本学の電話番号の市内局番が2桁に変わった。(因みに3桁になったのは1987年の案内から)

9. 図書館利用案内 1964

体裁・内容とも前2点にほぼ同じである。ただしこの版には一枚の「補訂正」が挿入してある。それには誤植訂正のほかに「指定図書」に関する記事と、プレハブ建て閲覧室（昭和39年11月増設）の記事がある。

本屋の閲覧室は午後5時閉室、プレハブ閲覧室は午後7時までの開館となった。

10. 図書館利用案内 —— 教官のために —— 1964

11. 図書館利用案内 —— 教官のために —— 1968

12. 図書館利用案内 —— 教官のために —— 1971

副題が示すように、研究者を念頭に置いて編集された利用案内である。

1964年版は構成も、蔵書、目録カードの検索、書庫内資料配置、入庫検索が中心で、その利用、さらには相互貸借⁽¹⁶⁾、文献複写と続く。教官閲覧室⁽¹⁷⁾に関する記事が目新しい。

1968年版では、創設以来45年を経て研究・教育の主要な支援機関としては書庫の収容能力が限界に達していること、そのため、川内キャンパスに新館を建設し移転する計画であることが巻頭の「はしがきに代えて教官各位へ」でふれられている。

増頁により、附属図書館のあゆみ、現況、組織が前半部に再び登場したほか、書庫内資料配置図や館蔵個人文庫についての簡単な説明も再現された。

文献複写にはじめて「電子複写」（B4判1枚30円）が登場した。また、図書の公開展示がおこなられたとの記事もみられる。

1971年版でも、増加し続ける資料が話題になっている。資料の一部を青

葉山移転で空室になった工学部の書庫に移動したこと、そのため急の利用希望には即時には応じかねる場合もあることなど、移転を直前にしての苦悩が窺える。

これら「教官版」は、表紙の色を変えながら移転の年まで刊行された。

- 13. 学生のための図書館利用案内 —— 本館利用の手引き —— 1967
- 14. 学生のための図書館利用案内 —— 本館利用の手引き —— 1968
- 15. 学生のための図書館利用案内 —— 本館利用の手引き —— 1969
- 16. 学生のための図書館利用案内 —— 本館利用の手引き —— 1970
- 17. 学生のための図書館利用案内 —— 本館利用の手引き —— 1971
- 18. 学生のための図書館利用案内 —— 本館利用の手引き —— 1972

前記の「教官版」案内と対をなす形で刊行されたのが「学生版」の利用案内である。これも1972年の本館移転まで表紙の色を変えながら後期課程の学生を対象として編集・刊行された。

1967年版は同じ頃の「教官版」と比べると、項目はほとんど同じながら、「学生版」には入庫に関する記事がなく、代わって閲覧室や借覧手続についての説明がその分詳しい。指定図書の記事も新たに登場した。目録カードの説明には写真を採用したり、請求記号を詳しく説明したりと学生版を意識した編集である。

平日は、午後9時までの開館である。

全学の蔵書は135万冊、うち本館は100万冊の所蔵とある。

1968年版は、毎年変化する蔵書数や職員名簿に訂正がある程度で、内容は前年版と大差はない。全学の蔵書は135万冊^(ママ)を超え、うち本館では102万

冊を蔵している。

「教官版」同様文献複写の項目に「電子式複写」が加わった。

1969年版では、洋書の分類表中に「IF: Dissertation」の項目が新設された。海外からの学位論文寄贈が増えたことによるのか。

全学の蔵書 141 万冊余。本館所蔵分は 105 万冊余となる。

1970年版によると、開館時間が平日午後8時までと1時間繰り上っている。全学の蔵書 146 万冊。本館には 111 万冊所蔵。

1971年版には、引っ越しを間近に控え、資料の収納にますます困窮し、利用者に不便を強いている様子が窺える。全学の蔵書 152 万冊余。本館 115 万冊余。

マイクロフィッシュ撮影室が設置された。

1972年版では、組織図と名簿の各1頁が削除された。前年設置のマイクロフィッシュ撮影室が稼働したのをうけて文献複写の項目に「1シート 290円(学内者)」の記事が追加された。全学の蔵書は 159 万冊。本館分は教養部分館所蔵分を含め約 140 万冊に増加した。(この年の4月教養部分館は本館に統合された)

19. 学生のための図書館利用案内 — 旧本館利用の手引 — 1973

新本館が川内キャンパスに完成し、教養部分館所蔵の図書、本館学生用図書と主要業務が新本館に移された。しかし、文科系4学部に移転がまだ実施されないため、本館の業務が旧館と新館とに二分された。これは、旧本館での利用の案内である。

5月には蔵書を含んだ全面移転の準備に入るため、利用案内としては一時的使用を目的としたものである。わずか3頁の簡便な案内で、書庫内資料の閲覧と文献複写業務を内容としたものである。

III. 川内移転以降（1973- ）

大正 14 年の本屋完成から 50 年を経て、本学の蔵書は、質量とも全国有数の規模になった。屋根に尖塔を持つことで親しまれてきた建物も老朽化が進み、書庫は多くの図書を詰め込んだため倒壊の危険さえ指摘されていた。

昭和 47 年 10 月完成した新本館は、北に教養部、南に文科系 4 学部、東に記念講堂を控えた川内キャンパスの中心地にあり、西方の理学部、薬学部、工学部の青葉山キャンパスの入口にあたる交通の要衝に位置している。東西 67 メートル、南北 75.5 メートル、総面積 12,480 平方メートルの建物は、レファレンス機能を中央に置き、その両翼に学習図書館としての機能と、研究図書館としての機能を配置するという独特な設計思想に基づいている。

教養部分館を統合し、昭和 48 年 11 月全面開館した新本館は、全学の中央館として、また川内キャンパスをサービスエリアとする専門図書館として位置づけられた。

開館を機に分類、目録の全面改訂を行い、情報提供機能を新たなサービスの柱として強く打ち出した。

昭和 54 年には、将来のコンピュータ化に備え業務の総点検が開始された。数年にわたる調査と準備を経て、昭和 62 年 6 月全学の図書業務はコンピュータ処理に移行した。また、全学を光ファイバーで結び、情報の交換を促進する学内 LAN（TAINS）の実現は、本分館間のみならず、学内の至る所からの蔵書検索を可能にした。

平成 2 年には、築後 20 年を待たずあふれる図書に再び狭隘さを増したため、2 号館（書庫）を増築した。

平成 5 年には、教養部が改組され、東北大学は新たな時代に入った。

20. 学生のための図書館案内——新営本館利用の手引—— 1973

夏休み期間を利用しての引っ越しとそれに続く蔵書の点検とを経て、昭和48年11月新本館は全面開館した。これは前年秋部分開館した新本館の移転後最初の利用案内である。年度末までのわずかな期間の暫定的な利用案内である。

4頁にもみたくないものであるが、ロッカー・ルーム、ブラウジング・ルームなどの諸室やエントランス・ホールなど耳慣れない施設に新館開館を実感される案内でもある。

21. 図書館利用ハンドブック 1974 (写真3)

全面移転が完了した翌年、研究者を対象として刊行された利用案内である。中央館としての機能と文科系の専門図書館としての機能とを有する本館の役割を広く利用者に周知し、一層の利用促進を図る目的で、学内の全教官に配布された。

構成は、「I. 図書館資料の利用」、「II. 図書館資料の入手から提供まで」、「III. 附属図書館の概況」の三部から成る。Iは、館内配置図、レファレンス・サービス⁽¹⁸⁾、相互利用・文献複写などの詳しい案内にはじまり、新設の閲覧諸室の紹介、目録・分類の説明に至るものである。IIにおいては、これまであまり利用者に知られることのなかった図書の受入から提供に至る一連の流れと、資料の利用手続とについての解説が詳しい。IIIには、附属図書館本・分館の沿革・概要、蔵書とくに館蔵の特殊文庫の紹介を掲げている。附録として関係規則・規程が巻末にある。全体に利用面を重視した編集で、これらの記事が100頁にまとめられている。

表紙には、本館正面玄関の写真を採用している。

この種の案内はその後刊行されていない。

22. 図書館利用案内——学生版—— 1974

副題が示すように、学生を対象としており、各種手続、閲覧システム、相互利用など利用全般に関する紹介と、分類・目録の詳しい解説とで構成されている。巻末には、本館の概況、利用規則がある点は「ハンドブック」と同じである。

23. 図書館利用案内——学生版—— 1975

構成から見る限り、前年版よりも一層「ハンドブック」を意識して編集されたものである。前年版には見られなかったレファレンス・サービスとその資料一覧、配置図に14頁を割いたり、文献複写や閲覧室の利用について豊富な見本例と詳細な資料配置図をいれるなどして、説明を助けている。その結果増頁につながり、新入生を対象として編集された簡便な案内書というよりはむしろ必要なときに参照する密度の濃い案内になった。

24. 利用案内 1976

仙台の浮世絵画家熊耳耕年^{クマミコウネン}（1869-1938）の木版画「芭蕉の辻」⁽¹⁹⁾（昭和6年・彩色）で表紙を包み込む体裁はこれまでにない明るい印象を与える。

新入生を主たる配布対象に限定し、頁数を前年版の約五分の一に圧縮している。そのため収載された項目も記事も、利用するうえで利用最小限の説明にとどめている。

25. 利用案内 1977

26. 利用案内 1978

27. 利用案内 1979

- 28. 利用案内 1980
- 29. 利用案内 1981
- 30. 利用案内 1982
- 31. 利用案内 1983
- 32. 利用案内 1984
- 33. 利用案内 1985
- 34. 利用案内 1986
- 35. 利用案内 1987 (写真4)

毎年表紙下部の帯の色を変えながら、その後10年余にわたり刊行され、新入生に親しまれてきた。その間1981年には新入生の図書館利用オリエンテーションにビデオテープが導入され、この案内を助ける役目も果たしている。

36. 利用案内 1988

「芭蕉の辻」の表紙で親しまれた案内は、前年のコンピュータ導入を機にオールカラー化され全面改定された。大きさも従来のものより幅で2センチ狭くなり、12頁仕立ての折り本形式とし、拡げての一覧も可能となった。

構成も、従来の説明を中心とし、図や写真でこれを補う形式の案内と、それらを表やチャートで示した案内とを、表裏別々に配置し、どちらか一方の案内だけでも利用が可能であるよう工夫してある。

- 37. 利用案内 1989
- 38. 利用案内 1990

39. 利用案内 1991

40. 利用案内 1992

41. 利用案内 1993 (写真5)

平成2年には、2号館が増築され、本館(1号館と呼称)書庫から資料の一部をここに移した。そのため利用面で多少の変更が生じ、1990年版ではその点改訂されている。

お わ り に

創設時400冊に満たない蔵書で発足した本館は、80余年後の今日200万冊を超える蔵書(全学では311万冊)を擁するに至った。このことは単に蔵書数の増加にとどまらず研究・教育の支援機関の一つとして常に大学の姿制に即応してきた結果でもある。利用案内はそれを示す顕著な一例といえよう。

注

- (1) 図書館が「附属」図書館になったのは大正5年6月7日の勅令による。〔「五十年史」(東北大学 昭和35年刊)1680頁〕
- (2) 「五十年史」1675頁。
- (3) 元京都帝国大学文科大学長狩野亨吉(1864-1943)旧蔵書108,000冊。和漢古典のあらゆる分野を網羅し、「江戸学の宝庫」と称される蔵書構成が特色。納入は大正元年の第一次につづき、大正十二年、昭和四年の三次に及んだ第一期と彼の没後の昭和十八年その遺蔵書の納入(第二期)にわたる。
- (4) 「五十年史」1679頁。
- (5) 大正八年勅令により、医学部と名称を変えた。
- (6) 「五十年史」1684-1686頁。
- (7) 同1724-1725頁。
- (8) 閲覧室略図の写真は失われている。
- (9) 社会科学研究者榊田民蔵(1885-1934)旧蔵書約3000冊(和1417冊、洋書1750冊)。マルクスの書き入れがある「哲学の貧困」が含まれていることで知

られる。

- (10) 「五十年史」1698-1699 頁。
- (11) 同 1699 頁。
- (12) 夏目漱石(1867-1916)旧蔵書。英文学関係書を中心にした約 3000 冊から成る。
- (13) 理学部の林鶴一、藤原松三郎両教授の収集したもの。すでに狩野文庫にも多くの和算書がありこれと合わせると本学にはわが国和算書の相当部分が収蔵されたことになった。
- (14) レオナルド・ダ・ヴィンチの研究家として著名な元本学文学部助教授児島喜久雄(1887-1950)旧蔵書。美術書を中心に約 1500 冊のコレクション。
- (15) 占領軍がなかば強制的に寄贈してきたアメリカの代表的教科書、教育専門書その他参考資料から成る。必ずしも大学図書館に適した図書ばかりではないといわれる。
- (16) 「複写装置のある大学では、現物を送付する代わりにマイクロフィルム複写を利用することになって」いるという。
- (17) 現在レファレンス・コーナーにある「内外の百科事典、辞書、年鑑、人名鑑、地図、書目、索引その他の参考図書を備付け」てあり、「教職員の自由閲覧に供して」いる。他にも「新着雑誌・・・外国週間紙、縮刷版、雑誌記事索引」を配架していた。
- (18) 「主要レファレンス・ブッケー一覧」として 10 頁近くを割いて、レファレンス・コーナー配置の参考書を掲げている。この種のリストは昭和 17 年刊行の版にすでにその先例を見ることができる。
- (19) 藩政時代の城下町仙台の商業の中心地を描いたもの。

本館における「利用案内」の変遷



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

本館における「利用案内」の変遷

付表 東北大学附属図書館本館 利用案内一覧

番号	資 料 名	大きさ(cm)	頁数	刊年	備 考
1	閲覧の案 自昭和10年至昭和11年	18.9×12.6	69	[昭11]	
2	自昭和12年至昭和13年	18.9×12.6	70	[昭12]	
3	東北帝国大学附属図書館閲覧案内[昭和17年]	15.0×10.5	32	昭17.3	
4	[昭和18年]	15.0×10.5	32	昭18.9	
5	東北大学図書館案内 [昭和30]	18.2×12.9	12	昭30	
6	[昭和31]	18.7×13.4	11	昭31	
7	図書館案内 1962	17.6×10.6	11	1962	
8	1963	17.0×10.5	11	1963	
9	1964	17.5×10.5	11	1964	
10	図書館利用案内—教官のために— [1964]	17.5×10.6	8	[1964]	
11	1968	18.3×11.1	24	1968	
12	1971	18.0×11.3	24	1971	
13	学生のための図書館利用案内 —本館利用の手引—1967	18.3×11.3	24	1967	
14	1968	18.2×11.3	24	1968	
15	1969	18.2×11.3	24	1969	
16	1970	18.2×11.3	24	1970	
17	1971	18.2×11.3	24	1971	
18	1972	18.2×11.2	22	1972	
19	学生のための図書館利用案内 —旧本館利用の手引—1973	20.9×14.9	[3]	1973	
20	学生のための図書館利用案内 —新営図書館利用の手引—1973	20.9×14.9	[4]	1973	
21	図書館利用ハンドブック 1974	15.0×21.0	99	[1974]	
22	図書館利用案内—学生版—1974	15.0×21.0	36	[1974]	
23	1975	15.0×21.0	60	1975	
24	利用案内 1976	15.0×21.0	12	1976	カラー
25	1977	15.0×21.0	12	1977	カラー
26	1978	15.0×21.0	12	1978	カラー
27	1979	15.0×21.0	12	1979	カラー
28	1980	15.0×21.0	12	1980	カラー
29	1981	15.0×21.0	12	1981	カラー
30	1982	15.0×21.0	12	1982	カラー
31	1983	15.0×21.0	12	1983	カラー
32	1984	15.0×21.0	12	1984	カラー
33	1985	15.0×21.0	12	1985	カラー
34	1986	15.0×21.0	12	1986	カラー
35	1987	15.0×21.0	12	1987	カラー
36	利用案内 1988	13.0×21.0 (78.0×21.0)	12	1988	カラー折本
37	1989	13.0×21.0 (78.0×21.0)	12	1989	カラー折本
38	1990	13.0×21.0 (78.0×21.0)	12	1990	カラー折本
39	1991	13.0×21.0 (78.0×21.0)	12	1991	カラー折本
40	1992	13.0×21.0 (78.0×21.0)	12	1992	カラー折本
41	1993	13.0×21.0 (78.0×21.0)	12	1993	カラー折本

○刊年は資料表示のもの。[] は推測による。

○() 内の大きさはひろげた時のもの。